

日蓮大聖人御書全集

いちねんさんぜんほうもん

一念三千法門

新版
357
〜
364

いちねんさんぜんほうもん

一念三千法門

しょうか ねん

正嘉2年 ('58)

37歳 さい

ほけきょう よきょう すぐ

法華經の余經に勝れたること、いかなることぞ。この經きょう

いっしんさんがん いちねんさんぜん

やくおうぼさつ かんど

に一心三觀・一念三千ということあり。薬王菩薩、漢土に

しゅつせ てんだいだいし い ほうもん さと たま

出世して天台大師と云われ、この法門を覚り給いしかども、

げんぎ じつかん もんぐじつかん かくいざんまい しょうしかん じょうみょうしよ し

まず玄義十卷・文句十卷・覺意三昧・小止觀・浄名疏・四

ねんじよ しだいぜんもんとう おお ほうもん と

念処・次第禅門等の多くの法門を説きしかども、この一念いちねん

さんぜん ほうもん だん たま ひやつかいせんによ ほうもん

三千の法門をば談じ給わず。百界千如の法門ばかりなり。

おんとしごじゅうしち なつしがつ ころ けいしゅうぎよくせんじ もう ところ

御年五十七の夏四月の比、荊州玉泉寺と申す処にて、

みでし しょうあんだいし おし たも しかん もう ふみじつかん かみ
御弟子・章安大師に教え給う止観と申す文十卷あり。上

しじよう ひ たま ろくそく ししゆざんまいとう
四帖になお秘し給いて、ただ六即・四種三昧等ばかりなり。

ご かん いた じつきようじゆうじよう いちねんさんぜん ほうもん た そ
五の卷に至つて十境十乗・一念三千の法門を立て、「夫れ、

いっしん ぐ とううんぬん にひやくねん のち みようらくだいししやく
一心に具す」等云々。これより二百年の後に、妙楽大師釈

い まさ し しんど いちねん さんぜん ゆえ
して云わく「当に知るべし、身土は一念の三千なり。故に、

じようどう とぎ ほんり かな いっしんいちねんほうかい あまね うんぬん
成道の時、この本理に称つて、一身一念法界に遍し」云々。

いちねんさんぜん いっしんさんがん ほうもん ほけきよう いち かん じゆうによぜ
この一念三千・一心三観の法門は、法華経の一の卷の十如是

お もん こころ ひやつかいせんによ さんぜんせけんうんぬん
より起これり。文の心は、百界千如・三千世間云々。

いっしんさんがん もう よしゆう によぜ
さて一心三観と申すは、余宗は「如是」とあそばす。こ

ひがごと　にぎ　欠　てんだい　なんがく　おんぎ　し　ゆえ
れ僻事にて二義かけたり。天台・南岳の御義を知らざる故な
り。されば、当宗には天台の所釈のごとく三遍読むに功徳
勝　まざる。

だいいち　ぜそうによ　そう　によ　そう　しよう　たい　りき
第一に「是相如（この相は如なり）」と、相・性・体・力

いげ　じゆう　によ　い　によ　くう　ぎ　ゆえ
以下の十を「如」と云う。「如」というは空の義なるが故に、

じっぼうかい　みなくうたい　よ　かん　とき　わ　みすなわ
十法界、皆空諦なり。これを読み観ずる時は、我が身即ち

ほうしんによらい　はちまんしせん　ほんにや　もう　だいに
報身如来なり。八万四千または般若とも申す。第二に

によぜそう　そう　わ　み　しきぎよう　あらわ
「如是相（かくのごとき相）」。これ我が身の色形に顕れ

そう　みなけ　そう　しよう　たい　りきいげ　じゆう
たる相なり。これ皆仮なり。相・性・体・力以下の十な

十法界みなけたい もう け ぎ よ かん

れば、十法界皆仮諦と申して仮の義なり。これを読み観ず

とき わ みすなわ おうじんによらい

げだつ もう

る時は、我が身即ち応身如来なり。または解脱とも申す。

だいさん

そうによぜ そう ぜ によ

ちゆうどう もう

第三に「相如是（相は是に如す）」と云うは、中道と申し

ほとけ ほっしん ぎよう

よ かん とき

わ みすなわ

て仏の法身の形なり。これを読み観ずる時は、我が身即

ほっしんによらい

ちゆうどう ほっしよう

ねはん じゃくめつ

ち法身如来なり。または中道とも法性とも涅槃とも寂滅

もう

とも申す。

みつ ほっ ぼう おう さんじん くう け ちゆう さんたい

この三つを法・報・応の三身とも、空・仮・中の三諦と

ほっしん はんにか げだつ さんとく もう さんじんによらいまった

も、法身・般若・解脱の三徳とも申す。この三身如来全く

ほか 外になし。我が身即ち三徳究竟の体にて、三身即一身の

わ みすなわ さんとくくきよう たい さんじんそくいっしん

ほんがく ほとけ

知

によらい

しょうにん

さと

本覚の仏なり。これをしるを、如来とも聖人とも悟りと

い し

ほんぷ

しゆじよう

まよ

もう

も云う。知らざるを、凡夫とも衆生とも迷いとも申す。

じっかい

しゆじよう

おのおのたが

じっかい

ぐそく

がつ

ひやつかい

十界の衆生、各互いに十界を具足す。合すれば百界な

ひやつかい

おのおのじゆうによ

ぐ

せんによ

せんによぜ

り。百界に各々十如を具すれば、千如なり。この千如是に

しゆじようせけん

こくどせけん

ごおんせけん

ぐ

さんぜん

ひやつかい

衆生世間・国土世間・五陰世間を具すれば、三千なり。百界

あらわ

しきそう

みなそう

け

ぎ

けたい

いち

と顕れたる色相は、皆総じて仮の義なれば、仮諦の一なり。

せんによ

そう

くう

ぎ

くたい

いち

さんぜんせけん

千如は、総じて空の義なれば、空諦の一なり。三千世間は、

そう

ほっしん

ぎ

ちゆうどう

いち

ほうもんおお

総じて法身の義なれば、中道の一なり。法門多しといえど

さんたい

さんたい

さんじんによらい

さんとくくきよう

も、ただ三諦なり。この三諦を、三身如来とも三徳究竟と

も申すなり。もう

はじめの三如是は、本覚の如来なり。終わりの七如是と一体

にして無二無別なれば、「本末究竟等」とは申すなり。「本」

と申すは仏性、「末」と申すは末頭の仏、九界の名なり。

「究竟等」と申すは、妙覚究竟の如来と理即の凡夫なる我

らと差別無きを、「究竟等」とも「平等大慧の法華経」と

も申すなり。

はじめの三如是は、本覚の如来なり。本覚の如来を悟り出だ

し給える妙覚の仏なれば、我らは妙覚の父母なり。仏は

われわれがう生こむとこころしの子いちなり。止いの一いにし云すなわわほとけく「止ほとけは則ほとけちほとけ仏ほとけ

はははは かん すなわ ほとけ ちち うんぬん たと ひとじゆうにん

の母、觀は即ち仏の父なり」云々。譬えば、人十人あら

めんめん くらくら たから 積 わ くら たから

んずるが、面々に蔵々に宝をつみ、我が蔵に宝のあるこ

し 餓 し 凍 し いちにん

とを知らず、かつえ死し、こごこえ死す。あるいは一人、こ

なか 賢 ひと さと い くにん つい

の中にかしこき人ありて、悟り出だすがごとし。九人は終に

し おし しよく 含

知らず。しかるに、あるいは教えられて食し、あるいはくく

しよく ぐ いち しかん にじ まさ

められて食するがごとし。弘の一に「止觀の二字は、正し

もんたい しめ き もの ほんまつくきようとう

く聞体を示す」と。聞かざる者は、「本末究竟等」もいたず

らか。

子こなれども、親おやにまさること多おほし。重華ちゅうかはかたくなわし

き父ちちを敬うやまって賢人けんじんの名なを得えたり。沛公はいこうは帝王ていおうと成なって後のちも、

その父ちちを拜はいす。その敬うやまわれし父ちちをば全まったく王おうといわず、敬うやま

いし子こをば王おうと仰あおぐがごとし。それ、仏ほとけは子こなれども、賢かしこ

くましまして悟さとり出いだし給たまえり。凡夫ぼんぷは親おやなれども、愚癡ぐちに

していまだ悟さとらず。委くわしき義ぎを知らざる人ひと、「毘盧びるの頂ちようじよう上う

踏ふみをふむ」なんど悪口あくぐちす。大おほいなる僻事ひがごとなり。

一心三觀いっしんさんがんに付ついて、次第しだいの三觀さんがん、不次第ふしだいの三觀さんがんというこ

とあり。委くわしく申もうすに及およばず候そうろう。この三觀さんがんを心得こころえすまし

じようじゆ

けごんぎよう

さんがい

いっしん

成就したるところを、華嚴経に「三界は、ただ一心なり」

うんぬん

てんだい

しよすい

うみ

い

述

ほとけ

われ

そう

云々。天台は「諸水、海に入る」とのぶ。仏と我らと総じ

いっさいしゆじよう

りしよういち

隔

びようどうだいえ

い

て一切衆生、理性一にてへだてなきを、平等大慧と云う

びようどう

か

よ

なり。「平等」と書いては、「おしなべて」と読む。

いっしんさんがん

いちねんさんぜん

ほうもん

しよきよう

絶

な

この一心三観・一念三千の法門、諸経にたえてこれ無し。

ほけきよう

あ

じようぶつ

よきよう

法華経に遇わざれば、いかでか成仏すべきや。余経には

ろっかい

はっかい

じっかい

あ

ぐ

あ

六界・八界より十界を明かせども、さらに具を明かさず。

ほけきよう

ねんねん

いっしんさんがん

いちねんさんぜん

いわ

かん

わ

法華経は念々に一心三観・一念三千の謂れを觀ずれば、我が

みほんがく

によらい

さと

い

むみよう

くもは

ほっしよ

身本覚の如来なること悟り出だされ、無明の雲晴れて法性

つきあき

もうそう

ゆめさ

ほんがく

げつりん

潔

ふぼ

の月明らかに、妄想の夢醒めて本覚の月輪いさぎよく、父母

う

にくしん

ほんのうぐばく

み

すなわ

ほんぬじょうじゅう

の生むところの肉身、煩惱具縛の身、即ち本有常住の

によらい

そくしんじょうぶつ

ほんのうそくぼだい

如来となるべし。これを即身成仏とも、煩惱即菩提とも、

しょうじそくねはん

もう

とき

ほうかい

て

み

生死即涅槃とも申す。この時、法界を照らし見れば、こと

ちゅうどう

いちり

ほとけ

しゅじょう

いち

てんだい

ごとく中道の一理にて、仏も衆生も一なり。されば、天台

しよしゃく

いつしきいつごう

ちゅうどう

しゃく

の所釈に「一色一香も中道にあらざることなし」と釈し

たま

とき

じつぼうせかいみなじやつこうじょうど

ところ

給えり。この時は、十方世界皆寂光浄土にて、いずれの処

みだ

やくしとう

じょうど

い

ほけきょう

をか弥陀・薬師等の浄土とは云わん。ここをもつて法華経に

ほう

ほうい

じゅう

せけん

そう

じょうじゅう

と

「この法は法位に住して、世間の相は常住なり」と説き

たも
給う。

きよう

しんじ

かんねん

じようぶつ

さては経をよまずとも心地の観念ばかりにて成仏すべ

おも

いちねんさんぜん

かんねん

いつしんさんがん

かんぼう

きかと思いたれば、一念三千の観念も一心三観の観法も、

みようほうれんげきよう

ごじ

おさ

みようほうれんげきよう

ごじ

妙法蓮華経の五字に納まれり。妙法蓮華経の五字は、ま

われ

いっしん

おさ

そうら

てんだい

しよしやく

た我らが一心に納まつて候いけり。天台の所釈に「この

みようほうれんげきよう

ほんじじんじん

おうぞう

せんぜ

によらい

しようにとく

妙法蓮華経は本地甚深の奥蔵、三世の如来の証得したも

しやく

みようほうれんげきよう

とな

うところなり」と釈したり。さて、この妙法蓮華経を唱う

とき

しんちゆう

ほんがく

ほとけあらわ

われ

み

こころ

くら

たと

る時、心中の本覚の仏顕る。我らが身と心をば蔵に譬え、

みよう

いちじ

いん

たと

てんだい

おんしやく

ひみつ

おうぞう

ひら

妙の一字を印に譬えたり。天台の御釈に「秘密の奥蔵を発

く。これを称して妙となす。権実の正軌を示す。故に号し

て法となす。久遠の本果を指す。これを喩うるに蓮をもつ

てす。不二の円道に会す。これを譬うるに華をもつてす。

声、仏事をなす。これを称して経となす」と釈し給う。

また「妙とは不可思議の法を褒美するなり。また妙とは

十界・十如・権実の法なり」云々。

「経の題目を唱うると観念と一なること、心得がたし」

と愚癡の人は思い給うべし。されども、天台、止の二に

「而於説黙」と云えり。説とは経、黙とは観念なり。また、

しきようぎ いち い く とうえん

四教義の一に云わく「ただ功の唐捐ならざるのみにあらず、

よ り かな よう うんぬん てんだいだいし もう

また能く理に契うの要なるかな」云々。天台大師と申すは、

やくおうぼさつ だいし せつにかんに しゃく たも もと

薬王菩薩なり。この大師、「説而観而」と釈し給う。元よ

てんだい しょしゃく いんねん やつきよう ほんじゃく かんじん ししゆ おんしゃく

り、天台の所釈に、因縁・約教・本迹・観心の四種の御釈

ししゆ じゆう し いち 品 み ひと いっこうほんじゃく

あり。四種の重を知らずして一しなを見たる人、一向本迹

旨 いっこうかんじん おもて

をむねとし、一向観心を面とす。

ほけきよう ほう ひ いんねん ほうせつ だん いた

法華経に法・譬・因縁ということあり。法説の段に至つ

しよぶつしゆつせ ほんかい いっさいしゆじようじよぶつ じきどう さだ われ

て、諸仏出世の本懐、一切衆生成仏の直道と定む。我の

いっさいしゆじようじきしどうじよう いんねん さだ たま

みならず一切衆生直至道場の因縁なりと定め給いしは、

だいもく

てんだい

げん

いち

しゆぜん

しようぎよう

え

題目なり。されば天台、玄の一に「衆善の小行を会して、

こうだい

いちじよう

き

こうだい

こうだい

もう

のこ

いんどう

たも

広大の一乗に帰す」と。「広大」と申すは、残らず引導し給

もう

しやくそんいちにんほんかい

の

たも

とうがく

うを申すなり。たとい釈尊一人本懐と宣べ給うとも等覚

いげ

あお

きよう

しん

しよぶつしゆつせ

以下は仰いでこの経を信ずべし。いわんや、諸仏出世の

ほんかい

本懐なり。

ぜんしゆう

かんじん

ほんかい

あお

ししゆ

禅宗は「観心を本懐と仰ぐ」とあれども、それは四種の

いちめん

いちねんさんぜん

いっしんさんがんとう

かんじん

ほけきよう

かんじん

一面なり。一念三千・一心三観等の観心ばかり法華経の肝心

だいもく

じゆうによぜ

お

だいもく

なるべくば、題目に十如是を置くべきところにて、題目に

みようほうれんげきよう

お

うえ

しさい

およ

とうせい

妙法蓮華経と置かれたる上は、子細に及ばず。また当世の

ぜんしゆう

きようげ

べつでん

い たも

おも

す

禅宗は、「教外に別伝す」と云い給うかと思えば、また捨て

えんがくきようとう

もん

ひ

うえ

じつきよう

もん

られたる円覚経等の文を引かるる上は、実経の文におい

おんいろ

およ

そうろう

ちしや

どくじゆ

かんねん

なら

て御綺えに及ぶべからず候。智者は読誦に観念をも並ぶ

ぐしや だいもく

とな

り

かな

べし。愚者は題目ばかりを唱うとも、この理に会うべし。

みようほうれんげきよう

われ

しんしyou

そう

いっさいしゆじyou

この妙法蓮華経とは、我らが心性、総じては一切衆生の

しんしyou

はちyou

びやくれんげ

な

おし

たも

ほとけ

みこと

心性、八葉の白蓮華の名なり。これを教え給う仏の御詞な

むし

このかた

わ

しんちyou

しんしyou

まよ

しyouじ

るてん

り。無始より以来、我が身中の心性に迷つて生死を流転せ

み

いま

きyou

あ

たてまつ

さんじいそくいち

ほんがく

によらい

とな

し身、今この経に値い奉つて三身即一の本覚の如来を唱

あらわ

げんぜ

ないしyouじyouぶつ

そくしんじyouぶつ

もう

うるに顕れて現世にその内証成仏するを、即身成仏と申

す。死しすれば光ひかりを放はなつ。これ外用げゆうの成じようぶつ仏もうと申もうす。「来世らいせに作さぶつ仏ふつすることを得えん」とは、これなり。

「略りやくして經題きようだいを挙あぐるに、玄げんに一部いちぶを収おさむ」とて、一遍いつぺん

は一部いちぶなり云々うんぬん。妙法蓮華經みようほうれんげきようと唱となうる時とき、心性しんしよくの如来にょらい顕あらわる。

耳みみにふれし類たぐいは、無量阿僧祇劫むりようあそうぎこうの罪つみを滅めつす。一念いちねんも随喜ずいきす

る時とき、即身成そくしんじようぶつ仏ふつす。たとい信しんぜざれども、種しゆと成なり、熟じゆくと

成なり、必かならずこれに依よつて成じようぶつ仏ふつす。妙樂大師みようらくだいし云いわく「もし

は取しゆ、もしは捨しゃ、耳みみに經へて縁えんと成なり、あるいは順じゆん、あるいは

違い、終ついにこれに因よつて脱だつす」云々うんぬん。日蓮にちれん云いわく「もしは取しゆ、

もしは捨しや、あるいは順じゆん、あるいは違い「の文もん、肝きもに銘めいずる詞ことば

なり。法華經ほけきやうに「もし法ほうを聞きくことあらば」等とうと説とかれた

るは、これか。既すでに「聞きくことあらば」と説とかれたり。觀念かんねん

ばかりにて成仏じやうぶつすべくば、「もし法ほうを觀かんずることあらば」

と説とかるべし。ただ天台てんだいの御料簡ごりやうけんに十如是じゆうにやぜと云いうは十界じっかいな

り。この十界じっかいは、一念いちねんより事起ことおこり十界じっかいの衆生しゆじやうは出いで来きたり

けり。この十如是じゆうにやぜというは、妙法蓮華經みやうほうれんげきやうにてありけり。

この娑婆世界しやばせかいは耳根得道にこんとくどうの国くになり。以前いぜんに申もうすごとく、「当まさ

に知るべし、身土しんど」云々うんぬん。一切衆生いっさいしゆじやうの身みに百界千如ひやっかいせんによ・三千さんぜん

世間せけんを納おさむる謂いわれを明あかすが故ゆえに、これみみを耳ふに触いつさいるる一切しゅじよう

衆生しゅじようは功徳くどくを得うる衆生しゅじようなり。一切いつさいしゅじよう衆生しゅじようと申もうすは、草木そうもく・

瓦礫がりがくも一切いつさいしゅじよう衆生しゅじようの内うちなるか〔有情うじよう・非情ひじよう〕。そもそも草木そうもくは

何なんぞ。金錍論こんぺいろんに云いわく「一草いつそう・一木いちもく・一礫いちりやく・一塵いちじん、各おのおのいち一ぶつしよう

仏性ぶつしよう、各おのおのいち一いんが因果えんあり。縁りよう・了ぐそくを具足とううんぬんす」等ほつしほん云々。法師品はふし

の始めはじに云いわく「無量むりようの諸天しよてん・竜王りゆうおう・夜叉やしや・乾闥婆けんたつば・阿修羅あしゆら・

迦楼羅かろうら・緊那羅きんなら・摩睺羅伽まごらが、人にんと非人ひにん、および比丘びく・比丘尼びくに、

妙法華經みようほけきようの一偈いちげ一句いつくを聞きいて、乃至ないしいちねん一念ざいきも随喜われせば、我われは

皆みなために阿耨多羅三藐三菩提あのくたらさんみやくさんぼだいの記きを授さずく」云々うんぬん。非人ひにんとは、

そう になんかい ほか いたさいうじようかい ころ

総じて人界の外、一切有情界とて心あるものなり。いわん

になんかい

や人界をや。

ほけきよう ぎようじや によせつしゆぎよう かなら いつしよう うち ひとり

法華經の行者は、如説修行せば、必ず一生の中に一人

のこ じようぶつ たと はるなつ た つく わせ おくて

も残らず成仏すべし。譬えば、春夏、田を作るに、早・晩

いちねん うち かなら おさ ほつけ ぎようじや

あれども、一年の中には必ずこれを納む。法華の行者も、

じよう ちゆう げこん かなら いつしよう うち しょうとく げん いち

上・中・下根あれども、必ず一生の中に証得す。玄の一

い じよう ちゆう げこん みなきべつ あた うんぬん

に云わく「上・中・下根、皆記別を与う」云々。

かんじん じようぶつ おも ひと いつぼう欠 ひと

観心ばかりにて成仏せんと思う人は、一方かけたる人な

きようげべつでん ざせん ほっしほん い

り。いわんや、教外別伝の坐禅をや。法師品に云わく「薬王

やくおう

よ。多く人有つて在家・出家にて菩薩の道を行ぜんに、も

ほけきょう けん もん ぶく じゆ しょ じ くよう

しこの法華經を見・聞・読・誦・書・持・供養することを得

あた まさ し ひと よ ぼさつ

ること能わずんば、当に知るべし、この人はいまだ善く菩薩

どう ぎよう きょうてん き う

の道を行ぜず。もしこの經典を聞くことを得ることあら

すなわ ぼさつ どう ぎよう うんぬん かんじん じようぶつ

ば、乃ちよく菩薩の道を行ず」云々。觀心ばかりにて成仏

けん もん ぶく じゆ い

すべくんば、いかでか「見・聞・読・誦」と云わんや。こ

きよう もつば もん ほん

の經は専ら「聞」をもつて本となす。

きよう あくにん によにん にじよう せんだい きら ゆえ

およそこの經は、悪人・女人・二乘・闡提を簡わず。故

かいじようぶつどう い びようどうだいえ

に、「皆成仏道」とも云い、また「平等大慧」とも云う。

ぜんあくふに じゃしよういちによ き

ないしようじようぶつ

善悪不二・邪正一如と聞くとところに、やがて内証成仏す。

ゆえ そくしんじようぶつ もう いっしよう しょうとく ゆえ いっしよう

故に、即身成仏と申す。一生に証得するが故に、一生

みようかく い ぎ し ひと とな ほとけ

妙覚と云う。義を知らざる人なれども、唱うれば、ただ仏

ほとけ よろこ たも われ すなわ かんぎ しょうぶつ

と仏とのみ悦び給う。「我は即ち歡喜す。諸仏もまたし

うんぬん ひやくせんあ くすり ぐち 飲 やまいい

かなり」云々。百千合わせたる薬も口にのまざれば病愈

くら たから も ひり 知 飢

えず、蔵に宝を持ってども開くことをしらずしてかつえ、

ふところ くすり たも の 知 し

懐に薬を持ってても飲まんことをしらずして死するがご

によいほうしゆ たま ごひやくでしほん きよう とく

とし。如意宝珠という玉は、五百弟子品のこの経の徳もま

たかくのごとし。

かんじん なら よ もう およ かんねん
観心を並べて読めば申すに及ばず。観念せずといえども、

はじめに申しつるごとく「所謂諸法如是相如云々」と読む時は、

如は空の義なれば、我が身の先業にうくるところの相・

性・体・力、その具するところの八十八使の見惑、八十一品

の思惑、その空は報身如来なり。「所謂諸法如是相云々」と

よめば、これ仮の義なれば、我がこの身、先業によつて受け

たる相・性・体・力云々。その具したる塵沙の惑ことごと

く即身応身如来なり。「所謂諸法如是」と読む時は、これ

中道の義に順じて、業によつて受くるところの相・性等

ちゆうどう ぎ じゆん ぎ じゆう ちゆう どう しょうとう

そくしんおうじんによらい しょういしよほうによぜ

しよいしよほうによぜ ちゆう どう しょうとう

そくしんおうじんによらい しょういしよほうによぜ

しよいしよほうによぜ ちゆう どう しょうとう

そくしんおうじんによらい しょういしよほうによぜ

しよいしよほうによぜ ちゆう どう しょうとう

そくしんおうじんによらい しょういしよほうによぜ

うんぬん

したが

むみようみなしりぞ

そくしんほっしん

によらい

云々。それに随いたる無明皆退いて、即身法身の如来と

こころ

ひら

じゆうによぜ

さんてん

読

さんじんそくいっしん

心を開く。この十如是、三転によまるること、三身即一身・

いっしんそくさんじん

ぎ

みつ

わ

ひと

ひと

一身即三身の義なり。三つに分かるれども一つなり。一つに

さだ

みつ

定まれども三つなり。